

編集後記

齊藤 裕輔 市立旭川病院消化器病センター

「胃と腸」53巻13号は「EUSによる消化管疾患の診断—現状と最新の話題」を特集した。EUSの開発から40年近くが経過し、EUSは消化管疾患の診断、治療方針の決定における補助診断法として、それなりに発展を遂げてはいるものの、拡大内視鏡や画像強調内視鏡、バルーン内視鏡、カプセル内視鏡など、内視鏡機器の進歩と比較すると、大きく停滞している感否めない。そこで、消化管疾患の診断・治療におけるEUSの現状の再確認と今後期待される最新の機器などの話題について取り上げ、今後のEUS診断の進んでゆく方向性を探ることが本特集号の目的である。

序説で清水は、EUS診断学の歴史と、近年のEUS診断が衰退をたどるに至った経緯、さらには、診断基準の時代的变化に対応可能なEUS診断のflexibilityをはじめ、新たなEUS診断機器の導入も含めた今後のEUS診断の進歩への期待を熱く語っており、筆者も本特集号への期待が高まった。

EUS診断の現状に関しては、主題の5編の中で述べられているが、消化管癌の深達度診断については、食道、胃、十二指腸、小腸、大腸におけるEUS診断成績の現状が報告され、特に、前田論文、小林論文は、長年にわたる膨大な症例の詳細な解析が行われており一読に値する。また、今後の展望として、奥野論文で示されたEUS-FNAによる術前の組織診断の重要性が今後一層増加することはもちろんのこと、松浦論文での食道癌の深達度診断におけるEUSの上乗せ効果の大規模前向き試験が今後開始されることや、小林論文での大腸癌の深達度診断において、内視鏡的粘膜下層剝離術(ESD)による大腸T1b癌に対する完全摘除可否の術前診断において、EUSが必須であり、重要性が再認識されるであろう、などの記述はEUSの今後の診断価値の再評価が期待されるものであり注目に値する項目と考える。

最新の話題として、ノートに5編の論文が掲載されている。食道癌に対するESDの将来的な適応拡

大の際に極めて重要となるリンパ節転移の評価を、リンア型EUSを用いて腹部・縦郭・頸部の3領域を術前に一気に診断してしまおうとの試みはこの分野のトピックスとなることが期待され、有馬論文では3領域それぞれの超音波解剖が詳細に解説されている。松浦論文では、内視鏡や生検を併用しても時に鑑別診断が困難なSMTとSMT様食道癌の鑑別において、EUSで1/9層の連続性に注目することで鑑別が可能となる可能性が示され、引き続いての詳細な検討が期待される。また、永島論文では食道・胃静脈瘤に対する新しい治療法としてのEUS下胃静脈瘤内コイル留置術を施行する際に、治療前後のEUSによる詳細な評価が必須であることが力説されている。さらに、辻論文ではいまだ開発途上であり、今後の臨床への応用が期待される、EUS elastographyを用いた消化管SMTの実際の像が提供され、この分野の発展が大いに期待される。EUS elastography (辻論文)と造影ハーモニックEUS (鎌田論文)はこれまで主に脾腫瘍性病変に対する新しい精密診断として用いられてきた技術であるが、症例の集積が少なく、有用性に関する十分なエビデンスは得られていないものの、今後消化管疾患、特にGISTを中心としたSMTの良悪性の鑑別診断に応用され、発展していく可能性が期待される。

本特集号のタイトルであるEUSの消化管疾患診断(食道、胃、十二指腸、小腸、大腸)の現状に関しては、前述した項目以外にはさほど目新しいトピックスは見いだせなかったが、最新の話題では、新たなEUS機器を用いた今後期待される新しい診断法を垣間見ることができ、本特集号でEUS診断の今後の方向性の一端が示されたものと考えられる。

消化管癌、SMTへの内視鏡治療の適応拡大が進んでいく中、現状ではその有用性がさほど評価されていないEUS診断が、新しい機種が登場、技術の進歩に伴って再度脚光を浴びる日が到来することを大いに期待する。